

複数言語環境を生きる生徒への中学校国語科の授業のあり方  
—年少者日本語教育・中学校国語科・中学校英語(外国語)科の視点から—

下村 京子 (上田市立第一中学校)

1. 実践の場の特徴

公立中学校である。生徒数 500 名強、19 クラス (うち特別支援学級 2 クラス) のほぼ全クラスで、一割程度の JSL の生徒が国語科の授業に出席している。

2. 実践の目標

- ① JSL の生徒・日本語を母語とする生徒共に「12～15 歳という成長段階にある」という点を共通点とし、その年代の言語発達課題である「抽象的な思考力を育てる」授業実践を行うこと。
- ② JSL の生徒にとって「国語科の学習対象は第二言語・外国語としての日本語である」ことを足掛かりに、日本語を母語とする生徒の英語 (外国語) 科学習の「基盤」としての国語科のあり方を探ること。

3. 具体的な実践の内容とその過程

現行の学習指導要領と JSL カリキュラム (中学校編) の国語科との照らし合わせと、各教材 (文) の「個別性」と「普遍性」を明確にする教材研究をもとに授業を組み立て、実践する。

3.1 授業実践の具体例

3.1.1 教材名 「モアイは語る—地球の未来」安田憲喜 『国語 2』光村図書  
授業クラス 2 年生 2 クラス (計 68 名 うち JSL 生 5 名)

3.1.2 教材研究

教科書の示す「学習のポイント」	現行の学習指導要領	JSL カリキュラム「ねらいとする言語活動一覧」より	英語科へのインターフェイス	
			教材文の個別性	教材文の普遍性
・論の展開に着目して筆者の主張を捉える	<p>【C 読むこと】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○語句の意味の理解</li> <li>ア抽象的な概念を表す語句</li> <li>○文章の解釈</li> <li>イ文章全体と部分との関係</li> <li>○自分の考えの形成</li> <li>ウ文章の構成や展開について、根拠を明確にして自分の考えをまとめる</li> </ul>	<p>【C 読むこと】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文章の展開を確かめながら主題を考えたり要旨をとらえたりする</li> </ul> <p>【D 言語事項】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事象や行為、抽象的な概念などを表す多様な語句について理解を深める</li> </ul>	・主題と副題、結論部との関係性	・文章構成と展開の仕方 (論説文)

### 3.1.3 授業展開と指導の工夫

第1時 1年時に学んだ教材文を使い、既習事項を思い出し、今回の教材文の範読を聞く。

第2時 前時に確認した既習事項を使い、今回の教材文の文章構成を確認する。

第3時 確認した文章構成をもとに、本論部の内容を理解する。

第4時 結論部の論理展開について、図表を用いて各自でまとめる。

第5時 教師が選んだ代表者の発表を聞き、自己のものとの比較検討を行う。

自作の学習プリントを3枚使用し、それに従って授業を行った。上記第1～3時が「普遍性」を学ぶ時間として教師主導の講義型の授業、第4・5時は「個別性＝文章の内容理解」の学習として、結論部の理解を活動のポイントを示した上で生徒個々の学習活動を行った。選定の際の評価基準は「題名と副題との関連性を図表で明確に表しているもの」とし、自分のまとめと他の生徒のまとめを生徒自身でも比較できるように、具体的な言葉で評価基準を示した。

## 4. 結果と考察（目標の達成度・課題）

授業として具体的に取り組み始めて4か月程度であるので印象論レベルではあるが、JSLの生徒と日本語を母語とする生徒との「学習者としての対等性」が確保できるようになったと感じている。実際、今回提示した教材文で「代表」となった生徒にはJSLの生徒もいるし、国語を「苦手」とする、日本語を母語とする生徒もいる。さらに、「抽象的な思考力」がつけられたかどうか具体的に検証するための手がかりとして活用できる既存のものとしては「定期テストと総合テストの得点の推移と相関性」を指標とすることが有効であると考えている。「総合テスト」とは、3年時に初見の文章にて出題されるテストである。ただ、「抽象的な思考力＝メタ認知能力」の一つの現れが初見の文章によるテストの結果と捉え、その伸長を得点の推移と相関性から読み取っていくことが有効かどうかの検証は、来年度を待つ必要がある。

また、英語（外国語）科との関連性については、実践者は平成30年度末に中学校二種（英語）免許を取得予定であるので、それまでに、国語科における教材（文）の「個別性」と「普遍性」を明確にすることが現在の課題だと考えている。明確にするための「基盤」は文法分野に求めていく。各単語が「文法」によって意味内容を構成することは、「文」のみならず「文章」の単位でも行われており、つまりは読解分野へもつながっていくと言えるからである。現在のところは、文法用語が同様の名前で英語科でも使われていることに気づかせるに留まっているが、それでも「英語科は英語科、国語科は国語科」と「別々のもの」という意識を持っていた生徒たちが、『ことばを学ぶ』という点については『共通するもの』がありそうだという気づきができるようになったと感じている。国語科、英語（外国語）科ともに既に個別の教科としての実践・研究の積み重ねがある。それらの実践・研究の中に、共通点を見いだせるものがあるかもしれない。先達の残してくださった財産から学ぶこともこれからの課題である。

### 【引用文献】

川上郁雄編著（2010）『異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー 私も「移動する子ども」だった』 くろしお出版

須田淳一（2015）「高大接続において測定可能な『教科横断能力』－国語科のCAN-DOリストの可能性－」『愛知大学短期大学部研究論集』67-87、

文部科学省(2008)『学習指導要領』 文部科学省(2007)『JSLカリキュラム 中学校編』